

# 大学院ニュースレター

## 久留米大学大学院医学研究科

第 75 号 / 2015 年 6 月 12 日発行

編集 / 医学研究科長

### 『 医学研究科長に就任して 』

大学院医学研究科長

病理学講座 教授 矢野 博久

桑野剛一前大学院医学研究科長を引き継ぎ、平成 27 年 4 月 1 日付けで久留米大学大学院医学研究科長に就任いたしました病理学講座の矢野博久です。大役を仰せつかり 8 年前に教授に就任したときと同じく身の引き締まる思いです。就任に際しこの紙面をお借りして一言ご挨拶申し上げます。私と久留米大学大学院医学研究科との関係は 32 年前にその門を潜り病理学の大学院生という立場から始まりました。私のライフワークとなる肝臓の研究もここから始まりました。卒業後は、前教授（現理事長）の神代正道先生のご厚意で、病理学教室で大学院生の研究を指導する立場となり、肝臓を含めた種々の癌の病理学的研究の指導に従事してまいりました。教授就任後もそれは変わりませんが、加えて、病理学という立場上、数多くの大学院生の学位審査にも関わる機会をいただいております。これまで医学研究科の発展に自分なりに貢献してきたつもりですが、今回、研究科長という大任を仰せつかり、浅学非才の身ではございますが、医学研究科の発展に全力を尽くす覚悟でございますのでよろしくお願い申し上げます。

さて、研究科長として久留米大学大学院医学研究科の理念・目的を改めて確認いたしますと、「医学・医療の分野で先駆的な学術研究を推進するとともに、幅広い視野、高度の専門性と豊かな教養及び人間性を備え、国際的に活躍し、地域医療に貢献しうる優れた人材を育成する

こと」と記されております。これらの目的を成就するためには、たくさんのやる気のある人材に大学院に進学してもらうことが重要ですし、大学院の活性化は大学の評価の上でも重要な項目の 1 つとなっております。しかし、大学院医学研究科の現状は、残念ながら定員割れの状態になっており、まずは、何とか大学院進学希望者を増やし、この点を改善できればと思っておりますので是非ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

桑野前研究科長は、実効性のある大学院教育の充実・発展を推進されました。まだ記憶に新しい事といたしましては、2014 年開催の久留米大学医学教育ワークショップでいくつか大学院改革案が提言されましたが、そのうち「満期退学大学院生の退学後 2 年以内に学位取得すれば「甲号」を授与するという規定の廃止」と「学位認定の基準となる副論文数を 3 編から 1 編へ緩和する」と言う 2 点について迅速に改革を実行されました。このほか残された重要案件として、大学院生の進捗状況の確認のための「中間発表会の実施」があります。現在、大学院医学小委員会で実施に向け詳細を検討しており、本年度はトライアルとして実施できればと思っております。

最後になりますが、創造性豊かな高い水準の研究の創出とグローバルに活躍できる優れた研究能力を備えた人材の養成に積極的に取り組んで参りますので、医学研究科委員の先生方

を始め、教職員など大学院関係者の方々におかれましては、何卒、ご支援・ご協力のほどよろ

しくお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

## 『 ～女性のライフスタイルの変化とこれからの周産期医療～ 』

久留米大学総合周産期母子医療センター  
教授 堀 大蔵

近年、女性を取り巻く環境は大きく変化して価値観も多様化してきている。女性の社会進出は価値観の変化により、未婚婦人の増加、晩婚化が著しくなっている。平成2年には35歳以上の高齢出産が3.9%であったものが、平成20年に生まれた出生時の約20%が35歳以上の高齢妊婦からの出生であった。また、近年、体外受精を含む不妊治療が増加しておりその平均年齢は37歳であり、40歳以上が30.7%と報告されている。

高齢妊娠はハイリスク妊娠が多く、高血圧、糖尿病、心疾患など合併症を持った妊婦が増加する。この様な合併症を有する妊婦は妊娠の負荷が掛かることにより重大な合併症に繋がることが有り、胎児にも影響を及ぼす。高血圧症や腎疾患など合併症妊娠は胎児発育に影響を及ぼし低出生体重児になることが多い。本邦において1980年代の低出生体重児の発生率は5%であったものが、2013年にはその発症率が10%と倍に増加している。この原因のとして、高齢による合併症妊娠の増加もその一つ考えられている。また、成人病の発症の起源は胎児期にある [Developmental Origins of Health and Disease (DOHaD)] と言われ、低出生体重児で生まれた児は成人病を発症する可能性が高いとされている。妊娠の母体環境は、次世代にまで影響を及ぼすことになり、周産期の母児管理は非常に重要となっている。

一方、ヒトの卵は37歳頃からアポトーシスが顕著となり、40歳以上では妊娠率の低下と

ともにダウン症などの染色体異常が増加し、流産率も高くなっている。米国産婦人科学会によれば、早期妊娠損失の50%が胎児染色体異常で、リスク要因として最も多いのが「母体の高齢化」と「妊娠損失歴」とされている。流産リスクは20～30代では9～17%であるが、35歳(20%)から急激に増加し、40歳で40%、45歳で80%にもなると報告されている。高齢妊娠では、流産に至らない場合でも13トリソミー、18トリソミー、21トリソミー(ダウン症)、ターナーなどの染色体異常の発症率が高くなる。この様なことから、高齢の妊婦では染色体異常の不安に苛まれ羊水検査を希望されることが多い。

出生前診断としては無侵襲的な超音波断層法、血清マーカーテストなどがあるが、前者は妊娠早期の検出率が低く、後者は陽性適中率が低いため、侵襲的な羊水検査が選択される。羊水検査は腹壁から子宮内の羊水腔に針を刺し、羊水を約20ml採取し、その中の胎児成分から染色体分析する方法であり、確実に胎児の染色体分析が可能である。しかし、非常に稀であるが、感染や破水により流産することも有り、また、羊水腔内に針を刺すことに抵抗を感じる女性が多い。

近年、母体血漿中の cell-free DNA を用いた胎児染色体異常スクリーニング法が開発され、無侵襲的出生前遺伝学的検査 (NIPT) として、本法では限られた施設で臨床研究が行われるようになった。本検査法は妊娠10～13週に母

体血を採血し、血漿中の cell-free DNA を Massively Parallel Sequencing (MPS) 法で解析する方法である。この方法では、胎児の遺伝子情報、遺伝性疾患の診断、父性の確認、体質の確認などが診断可能とされている。本検査法の陰性適中率は 99.8% で、陰性と診断されれば染色体異常の可能性は否定できる。陽性適中率は 35 歳で 80%、45 歳で 95% とされているため、確認の羊水検査が必要となる。本検査法を行うことにより、希望者は増加すると考えられ

るが、羊水検査の頻度は減少し、安全性は高まるものとする。

現在、当院で本検査ができるよう鋭意準備中で有り、今年 9 月から新たに出生前検査外来開設予定である。しかし、出生前診断は胎児の生命に拘わる社会的、倫理的な留意すべき多くの課題が含まれるため、十分なカウンセリングの下に行われ、遺伝専門医、臨床心理士など含めた十分なケアが必要となると考える。

## 事務通信

### ◆博士課程の皆様へ◆

#### 平成 27 年度 博士課程共通科目レポート提出期限について

博士課程共通科目を履修された方、前期レポートの提出期限が迫っています。提出先・レポート課題をご確認のうえ、所定の期日までにご提出ください。

博士課程共通科目を履修された方、前期レポートの提出期限は下記のようになっています。



科目名：遺伝子多型 (SNPs)

科目責任者：神田芳郎 (法医学・人類遺伝学)

締切日：6月30日 (火) 17時

提出先：医学部事務部教務課窓口

科目名：ゲノムドラフトの解明

科目責任者：石原直忠 (分子生命科学研究所)

締切日：9月25日 (金) 17時

提出先：医学部事務部教務課窓口

科目名：ゲノム創薬の進歩

科目責任者：児島将康 (分子生命科学研究所)

締切日：7月31日 (金) 17時

提出先：医学部事務部教務課窓口

科目名：免疫関連分子と T 細胞抗原  
レセプター多様性の解明

科目責任者：山田亮 (先端癌治療研究センター)

締切日：9月30日 (水)

提出先：第1回講義時に指示

### ◆現住所調査票未提出の方へ◆

修士課程・博士課程第2学年以上の大学院生の皆様へ「現住所調査票」を配布しております。未提出の方は、締め切りを過ぎておりますので、速やかに医学部事務部教務課へご提出ください。

ご協力よろしくお願いいたします。

※以後現住所の変更がある場合は「学生現住所変更届」の提出が必要です (大学院 HP よりダウンロード可)。

## ◆健康診断未受診者の方へ◆

医学部 B 棟 1 階保健室にて実施しておりました健康診断はお済みでしょうか？  
やむを得ない理由で受診できなかった場合は、これに代わる証明書をかならず  
保健管理センターへ提出してください。

特に、社会人学生の方で、職場で健康診断を受診される方は、受診後速やかに  
健康診断の写しを保健管理センターへご提出ください。

提出期限：6月30日（火）



平成27年度 大学院セミナーシリーズ（特別講義）  
カリキュラムのお知らせ

担当講座	講義日時	会場	講演者	講義テーマ
産婦人科学	6月18日（木） 17：00～18：30	教育1号館5階 1501教室	加藤 聖子 先生 （九州大学大学院医学研究科生殖病 態生理学・教授）	婦人科腫瘍発生機構の 考察
内科学 （呼吸器・神経・膠原 病内科部門）	9月1日（火） 16：00～17：30	基礎1号館 2階会議室	審良 静男 先生 （大阪大学免疫学フロンティア研究 センター・センター長）	M2 マクロファージと疾 患
病理学	11月6日（金） 18：00～19：30	基礎1号館 2階会議室	福嶋 敬宜 先生 （自治医科大学医学部病理学講座・ 病理診断部・教授）	膵臓病理の最近の知見
免疫学	11月24日（火） 16：00～17：30	教育1号館5階 1501教室	Mino-Kenudson, Mari 先生 （Harvard Medical School・Department of Pathology）	未定
糖尿病性血管合 併症病態・治療学	12月3日（木） 17：00～18：30	教育1号館5階 1501教室	太田 博明 先生 （国際医療福祉大学臨床医学研究セ ンター・教授）	女性の健康長寿に不可 欠な運動器の健康
神経精神医学	未定	未定	中村 純 先生 （産業医科大学医学部精神医学教 室・教授） ※平成27年3月退職	未定
内科学 （消化器内科部門）	未定	未定	未定	未定
看護学科	未定	未定	未定	未定

日時・場所等に変更がある場合には、大学院医学研究科ホームページでお知らせします。  
また、当該科目履修者は5回以上のセミナー出席およびレポートの提出をお願いいたします。  
レポートについては、各セミナー終了後1週間以内に、医学部事務部教務課までご提出ください。

## 編集後記

27年度がスタートして早くも3ヶ月が過ぎようとしています。学生生活はいかがお過ごしでしょうか。6月より教務課：大学院事務担当を菅原・東谷・龍頭の3人体制で行ってまいります。皆様のサポートに努めてまいりますので、今後ともどうぞよろしくをお願いいたします。  
本年度は、12コマの大学院特別講義を予定し、既に講義が行われたものもあります。履修登録されていない方も自由聴講が可能ですので、梅雨のこの時期に、学識を高める機会とされてはいかがでしょうか。（龍）